

令和元年度 第2回長野県総合教育会議

日 時：令和元年10月11日（金）

10時30分～12時00分

場 所：県庁3階 特別会議室

1 開 会

（伊藤企画振興部長）

おはようございます。皆さんおそろいになりましたので、ただいまから、今年度2回目となります、長野県総合教育会議を開会いたします。

私、進行を務めます企画振興部長の伊藤です。よろしく願いいたします。

それでは、まず初めに阿部知事、ごあいさつをお願いいたします。

2 あいさつ

（阿部知事）

改めまして、おはようございます。

今年度、第2回の総合教育会議ということで、各教育委員の皆様方には、お集まりいただきまして大変ありがとうございます。また、本日は有識者2名の方にもご出席いただきまして、心から感謝申し上げます。大変お忙しい中、ありがとうございます。また、後ほどお話をお伺いしたいと思っております。

今日のテーマは「学校に行きたくない・行くことができない子どもたちへの支援について」ということで、皆さんと意見交換をさせていただき、方向性を共有していきたいと思っております。

長野県の不登校の児童・生徒の在籍比率は、残念ではありますが、ここ数年増加傾向にあります。こうした現状に対しまして予防的な観点からの学校のあり方の見直し、またフリースクール等、学校以外の多様な学びの場への支援、こうしたものを考えていく必要があると思っております。

先日も麴町中学校の工藤校長をはじめ、有識者の方をお招きして「学びの県づくりフォーラム」を開催させていただきました。教育委員の皆様方の中にも、ご参加いただいた方もいて大変ありがたく思っております。

私は、これまでどちらかというと、子どもが学校に合わせるということを迫られていたような気がします。常々、私は学校とか学びの場は多様化した方がいいなと思っておりますし、子どもたちが伸び伸びと、そして自分たちの主体性をしっかり伸ばしていけるような学校であってほしいと思っております。いろいろ技術革新が進んでいる中で、一人一人の子どもに合った学

びが行えるような学校にしていかなければいけないと思います。

また、今、県庁内で来年度予算に向けていろいろな議論をしていますが、これは子どもの学校に限らず、日本の社会全般が、何というか、一つの道を行かないと、ちょっと外れてしまうと、なかなか元に戻りづらいみたいなこともあります。

子どもたちがやっぱり自分たちで自分の未来を選び取っていけるような、そういう社会でありたいと思いますし、学校システムでありたいなと思っています。ぜひ、私の思いを申し上げましたけれども、皆様方と率直な意見交換をさせていただき、方向付けをさせていただきたいなと思っています。

なお、私、この9月27日付けで全国知事会の文教環境常任委員長に就任いたしました。会長も替わって体制も少し変わりました。知事会の中で環境問題と、それからこの教育問題について取りまとめていく立場になりましたので、政府に対しても言うべきことはしっかり、知事会の立場としても、県の立場としても言っていきたいと思っていますので、ご承知おきいただいて、また教育委員の皆様方からもいろいろ、私を活用いただければありがたいなと思います。よろしくをお願いします。

長くなりましたけれども、有意義な会議になりますことを願って、あいさつといたしたいと思います。よろしくお願いいいたします。ありがとうございます。

(伊藤企画振興部長)

原山教育長、お願いします。

(原山教育長)

おはようございます。私からも問題意識ということで、そもそも学校に行かなければならない、学校に行かないといけないという前提があるから不登校という問題が起きると思うんです。

調べてみると、世界には義務教育の形として大きく二つあって、一つは日本のように、親が学校に行かせる義務を果たして子どもの学びを保障するという就学義務型と、あるいはイギリス、フランスのように、親に子どもに対する教育の義務を課すが、どこで学ぶか、学校なのか、家庭、あるいはその他の場なのかは親の選択に委ねるという教育義務型と、その二つがあるということが分かりました。

では、なぜ日本はそういう制度にしたのかなということですが、明治時代からずっとそうになっているわけですが、その当時、子どもは重要な働き手であり、労働の担い手だったので、そういう場から強制的に引き離して学びを保障するという必要性があったんだと、では現在においてどうなのかなということだと思っています。

義務教育というものの真の目的を考えたときに、すべての子どもたちに良質な学びを保障するために、私たちはどうしたらいいのかということを考えなければいけないのかなという問題意識で今日は議論したいと思いますので、どうぞよろしくお願いいいたします。

(伊藤企画振興部長)

本日の出席者は、お配りしている席図のとおりです。また、前回の会議からメンバーの変更がございました。教育長職務代理者の伏木久始様、ご紹介いたします。

(伏木教育長職務代理者)

本年7月より教育委員の任命を受け、教育長職務代理者を務めることになりました伏木久始と申します。信州大学教職大学院の専攻長を務めております。どうぞよろしくお願い申し上げます。

(伊藤企画振興部長)

なお、塚田委員は所用のため欠席をされております。

3 会議事項

学校に行きたくない・行くことができない子どもたちへの支援について

(1) 有識者による講演

(伊藤企画振興部長)

それでは、会議事項に入らせていただきます。

本日、お二方、ゲストをお招きいたしました。子どもの発達科学研究所主席研究員の和久田学様、それから子ども支援・相談スペース「はぐルッポ」代表の西森尚己様でございます。

お二方からご講演をいただいた後、行政側から資料の説明をし、その後に意見交換をしてまいりたいと思いますので、よろしく願いいたします。

それでは和久田様、よろしく願いいたします。

(和久田主席研究員)

では、私のほうから15分間という時間ということですので短いですが、せつかくこのような機会をいただきましたので、少し私の立場と私の意見を表明させていただきたいと思っております。スライドにありますけれども、私は実は学校の教員を長くやっておりまして、学校の教育現場で不登校の子どもたちの支援をしていたこともあります。

それから問題行動のある子どもへの支援をやっていたこともあったんですけども、そのとき、問題行動を起こす子どもに対してどんな指導をすべきなのか、正解が分からないという問題意識を持っていました。つまり、ある人は「厳しくしなさい」と言います。別の人は「病気だから医療が必要だろう」と言います。別の人は「心理的に傷ついているから、どこまでもやさしくしなければいけない」と言います。このように意見が分かれてしまいま

す。

そのときに医療系の大学院の先生に「正解はあるんだよ」と言われました。そしてその正解はどこにあるかを聞くと、科学であると、科学は再現性の確保ができることを意味すると大学院に入って学びました。その結果、かなりおもしろいこと、現場の先生が知っていればいいのという情報がたくさんあったんですね。

例えば生活習慣病、がんとか高血圧になりやすい人というのはこういう人だということ、僕らは知っています。例えば太っている人だとか、喫煙する人だとか。でも、不登校になりやすい子どもにどういう因子があるのかどうか、知りません。もちろんそれを適当に言ってしまうと差別になってしまいうんですけれども、科学的データで語るのであればそれは事実だと言えます。そして、それを使って予防することができるわけです。

当たり前ですが、幼少期、児童期の問題は、思春期の問題に移行し、思春期の問題は成人期の問題に移行します。そのことは既に研究によって証明されています。

問題のリスクを高める因子を危険因子、リスクファクターといいます。そのリスクファクター、危険因子だけでは十分ではありません。そうした危険因子があるとして、例えば太り過ぎだったり、遺伝要因があつたりしてがんになりやすい体質だと思っていなくても、スポーツをするとか、緑黄色野菜を取るとか、保護因子を知っていると良いわけです。

今日は不登校がテーマです。ここのスライドに載せましたけれども、これはBaker、Sigmon、Nugentという2001年のアメリカの論文です。Truancyは、不登校という意味なんですけれども、不登校に関係する因子が何かを挙げています。

このように、不登校に関しても、いじめに関しても、そのほかの暴力行為に関しても、世界中で研究が進められています。残念なことに、ほとんどの論文が英語で発表されていて、なかなか日本には入ってきにくいということがありましたので、これは医学同様、日本もそれに追随して、諸外国の先進的な研究から学び、その学びを発信するところまで持っていくべきだと思っています。

もう一つ、科学の立場として、今の不登校の状況については子どもの問題であろう、家庭の問題であろうということがよく言われます。子どもの発達障がい、それから家庭の養育力の不足、それから地域のコミュニティの崩壊みたいなことをよく言われるんですが、我々の健康問題もそうですけれども、すべての問題は個人要因と環境要因のかけ合わせで起こります。

今日は知事から、大変力強いお言葉をいただきまして、教育、学校に子どもを合わせるのではなくて、子どもに学校が合わせるんだという話がありましたが、それはまさに個人要因と環境要因のバランスをどう取るのかということなんですね。

現状ですとこれは医療モデルと言いますが、個人要因に注目します。子どもを治せばいい、つまり個人の問題だと、不登校になった子どもに問題があつて、育てた家庭の環境の問題だろうという、治療的働きかけというふうになって、こういうのは実は、ディスレパンシーモデルといいます。

ディスクレパンシーモデルというのは差を見るので、ノーマルな子どもに対してアブノーマルな、言葉は悪いんですけども、異常な子どもの差を見つけて、差を見つけたらなんとかするというモデルなんですけれども、一方、環境に注目しましょうと、こういう問題を起こしてしまった、そういう問題を増やしてしまった環境に何か問題があるんじゃないかということを見ると、問題を起こす前、起こさないようにするにはどうしたらいいのかという予防的な働きかけができて、これを実はRTIモデルといいます。今日、僕の話は、このRTIモデルを採用しませんかという、そういうご提案です。

さらに詳しく、RTIモデルとディスクレパンシーモデルの差についてご説明しますと、ディスクレパンシーモデルというのは、さっき申し上げたように、何か問題を起こした子どもの問題に集中します。ですから、異常な子どもを見つけるという感覚なんです。別にそれは差別しているつもりはないんでしょうけど、やっぱりあの子は普通と違うよね。だから、何か治療的にしなければいけないよねということになります。別の言い方をすると、子どもが何らかの問題を起こすまで支援が入らないというモデルになります。これは失敗を待つモデルと言われていて、実はアメリカでは1990年台から2000年代にこれはちょっとまずいよねとって、このやり方をやめようとなったんですね。

つまりこれは治療介入モデルです。問題がある子どもに対して治療をすると。それは、先ほど知事がおっしゃった、子どもが環境に合わないから子どもの方に問題があったんだろうと、子どもを環境に合わせるように、子どもの方を変えましょうということになります。つまり環境中心主義、学校の方が問題ないと、子どもの方に問題があると。

一方、RTIモデルというのは環境の問題に注目します。そして、支援の不足を見つけます。子どもが失敗するのは支援の不足だろう。支援を提供できない環境の問題だろうというふうになります。よって、RTIモデルは子どもに失敗をさせません。子どもは失敗した瞬間に傷ついてしまいます。セルフエスティーム、自己肯定感が下がってしまいます。自己肯定感の低下が思春期以降の問題に移行するというのは、強力なエビデンスがありますから、それを避けなければなりません。

このようにRTIモデルは予防教育モデルであって、先ほどお話があったように環境を子どもに合わせるにはどうしたらいいのかということ。つまり子ども中心主義です。これまで我々は子ども中心主義だといいいながら、伝統的な学校教育を保持するということに注目してしまっている可能性があります。不登校が減らないのは支援の不足ではなく、現在の我が国の教育が今の子どもの発達に合わなくなっていると、環境全体の問題である可能性があります。

かつて有効だった教育モデルへの盲従のあまり、結果として子どもを傷つけている可能性があるんじゃないかと、私は思っているということです。

RTIモデルについてさらに説明をしますと、RTIモデルはここに書いてあるとおり、日本ではLDの支援の方法として入ってきています。生徒指導の方、今言った不登校だとか、非行だとか、いじめだとかの予防モデルでも必要なんですけど、実はそっちはほとんど入って

きていません。研究会が立ち上がっているところもあるようですが、まだ十分ではありません。

R T Iモデルをざっくりと説明します。これが医療のR T Iモデルです。公衆衛生ですから、まずすべての人に対してたばこはやめましょうとか、野菜をとりましょうとか、スポーツしましょうとか、という啓発をします。それで、何らかの初期症状が出た子ども、人に対して、二次的に生活習慣を変えましょうとか、すぐに発見してすぐ直してしまおうとします。そしてそれでも病気になってしまった人は、科学を使った徹底的な解明を行うという、このモデルですね。

我々は、僕も学校現場にいたので分かりますけれども、ディスクレパンシーモデルはこの図の一番上だけに介入します。問題が起きた群に対して何かをするけれども、問題が起きない群に関しては、あまり興味がないということだから見えてこないということになります。そうすると、問題が起きた群に対しての支援を一生懸命充実しても、問題が起きたことが前提での支援ですから、問題を起きなくするという支援は難しくなります。

これをこのまま不登校のモデルに当てはめてみましょう。

すべての子どもが対象の、不登校になりにくい、多様な子どもを受け入れ、不登校を起こしにくい環境をつくる。非認知スキルを育成することが大切です。

一方、個別の介入支援のところに、現在、日本のほとんどのリソースがそこに投入されているんですけども、それには理由があります。この一次支援というのは難しいんです。なぜかという、問題が起きたことの問題を解決することができれば誰もが成功体験を積むことができます。ところが問題が起きないことを起きないまま保持するというのは、結果も見えにくい上に、どうしたらいいのかも分かりにくくなります。

このことに対して、統計学を使うことが必要になります。公衆衛生では、統計的に効果と何をすればいいのか、明らかにします。

では時間もあと5分ほどですので、具体的な方法について少し紹介しておきます。

もし長野でこのR T Iモデルでもって、子どもの支援をもう一回組み立てていこうと考えるとすれば、私は全面的な変革ではなくてリフォームという言葉が良いと思います。今の長野、それから日本の教育界にはいいことがたくさんありますね。欧米が全部いいとは思っていません。ですから、リフォームです。良いところは残し、変えた方がよいところは変えていただくということなんですけれども、例えば一次支援のところを見ましょうね。この写真は、ボストンの郊外にあるEssex Elementary Schoolという、Essexという、これ地方の名前なんですけれども、そこの普通の小学校です。これは読書の時間です。ニューロダイバーシティと書いてありますが、これはOECDが最近言い始めた概念で、一つの教室にいる子どもはみんな質が同じではない、むしろ多様な脳機能を持つ子どもが集まっている集団であると。だから、どの子どもも違っていることを前提としています。ワンフィットオールではなくて、多様性がある子どもが前提の教室環境と教室の教授法をしようということです。

これは極端な例ではありますが、ボールに座っている子どもがいますね。ADHD傾向の

子はこういうのに座っていると、体に良い刺激が加えられて集中力が保たれると言われて
いるからです。いろいろな姿勢の子どもがいますが、大事なのは、姿勢を直すことではなく
て、何を学ばせられるのかだというんですね。

それからもう一つ、一次支援では非認知スキルの育成が大切とされています。非認知スキ
ルというのは学力以外の力で、実はこれ日本では「ヒドンプログラム」、すなわち隠れてい
る教育内容です。例えばコミュニケーションだとか、人と問題が起きたときの解決方法とか、
我慢する力とか、協力することとか、ものすごく大事なことばかりです。

OECDのレポートだと、このような非認知スキルを育てた方が、結局は学力を高めるこ
とができると言われてしています。さらには不登校など様々な発達上の課題の予防効果があり
ます。今、日本では、発達障がいのお子さんに特別支援教育の一環で社会性を教えていま
すけれども、もうどの子も必要であると考えべきです。下の写真はソーシャルシンキングと
いうプログラムをしているところです。

次は、二次支援です。初期対応ですね。何か問題があった子どもにどうするのかというこ
とです。今の学校現場では、スキルのある先生がとても上手に介入します。でも、経験の少
ない先生ですと、初期対応をミスしてしまい、問題をさらに大きくしてしまうことがありま
す。

この初期対応については、行動分析学や認知行動療法学など、既にエビデンスがあるとさ
れている方法があるので、それを使うことを進めます。そうであれば、先生たちも安心して
指導が可能になります。

この写真は、問題解決のシックスステップというものです。今日の参加者の中には幼児教
育の先生たちもいらっしゃると思いますが、幼児教育のエビデンスのあるプログラムで有
名なハイスコープというのがあるんですね。これは質の高い幼児教育を行うとその影響は
40代、50代まで続くという、超有名な研究があるんですけども、そこのプログラムで使わ
れている方法です。

何か問題があったら、この6個のステップを踏んで子どもたちに介入します。これを毎回、
同じようにどの先生もやっていくと、だんだん子どもたち自身がどうすればいいのかがわ
かっていくということですね。

もう一つ、紹介させていただくのは、これはコロラド州デンバーで教えてもらったこと
です。実は私、2000年代初頭にデンバーに視察に行ったのですが、その視察先はものすごく不
登校に力を入れていて、どの学校もものすごく分厚い不登校マニュアルを持っていました。
教育委員会レベルでやっていたんですが、ここでは理由が明快でないお休みが数日続いた
ら、不登校の初期対応用のカルテを作ることになっていて、そのカルテの形式が決まってい
ます。

細かくて申しわけないんですけども、不登校の状況だとか理由だとか、何をしているの
かいろいろあります。チェックボックス式にしているのは、データベース化しやすいからで
す。対象の子どもの危険因子、保護因子をチェックして、危険因子はなるべく取り下げる、

保護因子は多くするという非常にメカニカルな支援方法をここから作っていきます。

あと三次支援になりますと、実は日本の先生たちは得意です。日本でもスクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラーや地域の専門家、フリースクールなど不登校の子どもを抱えている専門家の方がさまざまな方略でやっていますけれども、それにエビデンスをつける必要があります。

今、割と個人のスキルに任されていることが私の地域では多いんです。さらには例えば思春期は精神疾患の好発期であることも分かってほしいことです。さらに自殺の予防も必要ですから、自殺の前の前兆行動などについても、知識を共有しておくことが重要かと思えます。

最後に日本の教育の強みを活かすことが大切というお話をさせていただきます。もともと自分が教員でしたから言うわけではないんですけども、日本の先生はジェネラリストなんですね。すべてのことをやれる先生が多い。非常に質は高いです。

しかも、誰かからやってもらおうじゃなくて、自分の学校の子どもは自分で守ろうという意識も高い。自校研修文化というのがあって、私も一生懸命やりましたけれども、そこを活かしていくことが大切です。欧米だと、ここにあるような研究者に開発とかを任せてしまって、あとは教師はトレーニングを受けるだけですけれども、日本の場合は、研究者がエビデンス理論、スキルを提供して、あとは教師と一緒につくっていくというような形ができるのではないかと少し夢を見ているわけです。

もう一つ、研究の必要性についてです。こういうことがいいらしいから、現場でやりましょう、ということでもいいんですけども、先ほど申し上げたように、予防というのは効果が見えにくいものですから、なかなかそれを続けてやっていくことが難しくなります。だから、ある先生がやったらうまくいったけれども、別の先生になったらだめということが起こります。

そんなとき必要なのはやっぱりエビデンスだと思うんですね。

一つは研究で、先ほど危険因子、保護因子の話をしましたけれども、長野の子どもたちに何が起きているかを明らかにします。例えば不登校になった子どもでも数年で復帰する子と、そうじゃない子どもがいるんだけれども、それはなぜだろうとか、果たして、こういう支援は、それは有効なのか、むしろ邪魔しているのかとかを明らかにします。こうしたことは研究が得意とするところなんです。それはやっていくと、先生たちがより費用をかけず、努力をせず、逆にいうと効率のよい方法を見つけられます。つまりどこに限られたリソースを投入すればいいのかが明確になっていきます。

もちろん効果について明らかにすることも大切です。これは別のところでやった私の研究ですけども、介入したグループは学校風土、学校の雰囲気が上がって、そうでないグループは変わらないというような結果が明らかになったこともあります。

まとめです。もうこれは、この先生たちとは共有できることだと信じておりますけれども、教育にこそ未来があると。今の子どもたちが、将来保護者となり、将来の社会の構成員

となります。この子どもたちの自立をきちんとしておくことが我々全体、日本の国、それから地域の未来となります。

これはイギリスのデータですけれども、小さいときにお金をかけておくと、やはり成人期に予防的に効いてきます。行政全体として考えるならば教育こそ予防であると思っているものですから、ぜひ、こういう機会をいただきましたので、長野県で何か先進的な実践をしていただけるとありがたいと思いますし、協力させていただきたいと思っていますところですので。ご静聴ありがとうございました。

(伊藤企画振興部長)

和久田様、ありがとうございました。

それでは続きまして、西森様、よろしく願いいたします。

(西森代表)

はぐルッポの西森と申します。よろしく願いいたします。

はぐルッポの名前は、ハグする、育む、グルッポはイタリア語でグループということですので、はぐルッポという造語をつくりました。とても気に入っている名前です。

はぐルッポの立上げと、それから活動については、先にこの資料をお配りしてありますので、それを見ていただくということで勘弁させていただきたいと思います。

はぐルッポというのは、学校へ行くことを目的とはしていません。はぐルッポで私たちスタッフが大事にしていることは、誰もがありのままの自分でいられて、言いたいことが言えて、いろいろなことに挑戦して安心して失敗することができる。そういう環境を子どもと一緒につくっていきこうという、そういうことです。指導するとか、コントロールするとかというのはなくて、子どもから必要とされたときにサポートする。その子が自分で考えて、自分で決めて、一步を踏み出す、そのエネルギーを育むお手伝いをしている場所です。

発足当時は周りからの抵抗が強くありました。学校復帰を目的としないなんて何ということだと。そんな楽しいことばかりやっていたら、もっと学校に来られなくなるじゃないのと、本当にいろいろ言われて批判もされて、いっぱい切ない思いをしてきました。

けれど、傷ついている子どもたちにとって、はぐルッポのような自由に遊んだり何もしないでいることだって保障される、そういう学校と家との間にある隙間のような、その秘密基地のような、そういう場所が、何をするというのではなくて、ただいい場所として存在することが必要なんだと考えて、それを信念としてずっとやってきました。

でも、結果として、学校へ行く子は非常にたくさんいます。はぐルッポの子どもたちですが、現在、小学校1年生から高校3年生まで、毎回10人から15人ぐらいの子どもたちが来ています。男女比は大体半々ぐらいですね。送迎してもらって車で来る子もいれば、歩いて来る子、それから自転車で来る子、それから電車とかバスを使って一人で来る子もいます。

来ると、それぞれが思い思いで自分のしたいことをしてすごしています。はぐルッポに来

ている子どもたち、本当にいろいろな子どもがいて全部違います。いじめで学校へ行けなくなった子、友だちの関係のいざこざとか、それから友だちとコミュニケーションが取りにくい、それで苦しくなったとか、先生とうまくいかない、先生と関係づくりができない子、それから学校へ行くと緊張してしまうHSCの子。それから登校するけれども教室に入れない子。それから発達障がいの特徴を理解してもらえずに、学校にいつらいと感じている子。それから家庭環境の不安定さが大きな原因となっているケースもあります。本当に多様な子どもたちが来所しています。

この来所している子どもたちに共通して言えることは、学校へ行かないことは何か悪いことで、行けない自分は悪い子なんだと、何か自分はだめな子なんだというような、学校に行けないことに負い目を感じている子がほとんどだということです。そしてみんな自信がない。自分に自信がない子が多いです。

昼間、ほかの子は学校に行っているから外に出ちゃいけないと考えたり、昼間、外へ出ると知り合いに会うから、家の中にこもっていて夜しか外へ出られないとか、そういう子もいます。この間、夏休みに一人の子が、夏休みになるからゆっくりする、僕はゆっくりするんだという子がいて、いつも学校にいかなくてゆっくりしているんじゃないのと聞いたら、「堂々と休めるからゆっくりしたいんだ」と。それくらい、子どもたちが学校へ行かないことを負い目を感じているんです。

それから親からも、みんなは学校に行っているんだから、家にいてゲームなんかしてはいけないと、ゲームを取り上げられた子どもたちはどんどん追い詰められる。

一方、相談に来る保護者も同じなんです。子どもが学校に行かないことイコール、うちの子はだめなんじゃないかと感じたり、引きこもりになるんじゃないかと、そこまで考える親がいます。

あるいはお母さんが、親がいけないんじゃないのと言われていたような気がして、自分の育て方が悪いんじゃないかと自分を責めて悩んでしまう人もいます。

親も自分がいじめに遭ったような、そんな気持ちになって、親も子も一緒に、ときには子ども以上に病んでしまっている場合もあります。

はぐルッポにはそういう苦しい思いの親が最初に来て、それから子どもが来るというスタイルが多いです。

あと、学校は何とか学校に戻したい、あるいは学校へ来るのが一番いいことだというのを前提で話をすることが、どうも多いように思います。相談に来る子どもも親も、学校に対する不信感を持っているケースも少なくはないです。それで学校と子どもと親との関係がうまくいかなくなることも多いです。これも子どもや保護者に共通していることですが、私たちははぐルッポは、その親と学校とのつなぐ役目もしたいなと考えています。

最近では病院のお医者さんから、無理して学校へ行かせないほうがいいですよとか、学校からもあまり無理しないほうがいいですねと言われたと聞くこともありますので、社会的に少し変わってきたような気もしています。はぐルッポにもお医者さんからの紹介で何人

も来ています。はぐルッポに来ている子たちは確かにみんな変わってきているし、親たちも変わってきていると思っています。

ちょっと子どものことをお話したいんですが、A君という子がいました。発達障がいがあることで学校ですごくひどいじめを受けて、学校へ行けなくなりました。部屋に引きこもってご飯も食べずに、お母さんがちょっと声をかけるとひどく暴れて、何か物を投げたり、物を壊したりして、お母さんはこの子と一緒に死にたいと思ったぐらいだったと話してくれました。はぐルッポに無理やり連れてこられたとき、A君にこれからどうしたいと聞いたら、僕は死ぬからいいと言っていた子でした。

私に学校へ行かなくてもいいよと言われたA君は、はぐルッポならと通い始めたんですけども、はぐルッポで自由に過ごしながら、次第に元気になっていきました。それを見てお母さんも変わったんですね。A君が学校へ行けないということを、彼にとっていま必要な時間なんだと、あなたは今のまま、そのままでいいよと認めることができるようになりました。

そうしたら、彼は誰に言われたわけでもなく、学校へ行くようになってきました。苦しくなるとはぐルッポへ来て、学校であった嫌なことを話して、また学校へ行くというのを繰り返して、そのうちに高校へ行きたいと相談に来て、志望した高校へも入りました。その後、今度は大学に行きたいと、やっぱり相談に来て、今年第一志望の国立大学に受かって、今、行っています。大学でも苦しくなると電話をかけてきて、相談しています。

大人が子どもの現在を丸ごとそのままいいよと認めてあげて、その上で粘り強く待つことで、子どもが自分の力で変わってきた、そういう例はたくさんあります。子どもが自分を認めてもらったと感じたときに、そのときに、いろいろな手立てが見えてくると思っています。

もう一人、高機能広汎性の発達障がいを持つS君、彼はやっぱり学校でひどいじめがありました。それとお母さんがほかの子と同じように頑張らせたいと、通わせていたので、それでイライラして学校へ行けなくなりました。

はぐルッポへ来て、S君の楽しそうな顔を見てお母さんが変わりました。それから「こんな弟、いなければよかった」と思ったことがあるというお姉さんも変わりました。家族がS君の障がいの一番の理解者となって、S君を支え始めて、お姉さんは、障がいのある子にとっては小さいときの接し方こそが大事だと考えるようになって、幼児教育に進みたいと、今、短大に通っています。

これは障がいのある子どもの障がいをちゃんと理解して認めて、彼にとって最善の環境を家族で考え、支えることができるようになって、彼の笑顔が戻ってきたのです。多くの場合、親たちの世間体とか世間の価値観とか、そのようなものによって子どもが追い込まれていくケースというのがとても多いように思っています。この家族は、周りの常識みたくないものから抜け出ることになって、彼の新しい一歩の手助けができるようになりました。

まだまだいっぱいあるんですけども、時間がないので、それに比べて、こんなことを言

うとあれなんです、学校はあまり変わっていないような気がしています。

だけど、当然だけれども、学校の役割というのはとても大きいことを感じています。子どもたち一人一人のその多様な学びを保障するために、今、学校自身が現在の制度や仕組みとか、あり方を自ら問い直すこと、それがこれからは求められていくとは思いますが、学校も忙しい中で一生懸命してくださっていると思っています。

こんなことがありました。ある中学校の支援会議、学校に伺ってきたときのことなんです、何とか学校の前まで来て、でも入ることができない生徒がいるんですね。教頭先生が、ほかの生徒もいるから、制服で来ないのはちょっと、と渋っている。そのときに校長先生が言ってくれたんですね。「そんなことを言っていないで、特別扱いしてやろうよ、えこひいきしてやろうよ。あの子は本当にここまで来るのに、いくつもいくつも高い山を越えてくるんだから。」と。

それから家庭環境の不安定さでずっと不登校の女の子、中学生がいました。その子が友だちからのいじめや学校の先生とうまくいかなくて、先生が嫌だから行かないと言って行かなかったんですけども、校長先生と、それから教務主任の先生がちょくちょく、はぐるッポに顔を出してくれたんです。

そしてその子が「先生、学校行かなくてごめんね」と、そう言ったら、教務主任の先生が、「何をばかなことを言っているんだ。お前がどこにいても元気でいてくれることが大事なんだよ。」と、そう言ってくれました。こういう温かい思いの先生がいると、本当に子どもたちは元気になっていきます。

しかし、すべての学校ということではないんですが、ちょっと無意識的でしょうけれども、結構、子どもたちを傷つけるようなことをしてしまうこともあるんじゃないかと思います。

相談に来た親御さんから聞いたこんな例があります。小学生、女の子なんですけれども、担任の先生がクラスの子どもたちのお手紙を届けてくれる。みんな1学期の目標を全部コピーして届けてくれた。でも、その子は、今、学校に行けていないのに、早く来てねとか、元気になってねと言われることが切ない、胸が苦しくなる。挙句に、自分をいじめていた子までが、早く来てねと書いてある。もう、そのときは切なかった、そういうふうに言っていました。

先生たちの善意とか、よかれと思っていることが、案外、かえって子どもを苦しめるということもあるんだよということを感じたんですが、難しいことだと思います。それがいいという子もいるので、そこら辺はよく話ができればなと思います。

私はもっとショックな話があって、中学生なんです、中学のクラスで騒いでいたときに、「そんなことをすると特別支援の〇〇教室にやっちゃうぞ」と、そう先生が言ったんだと子どもから聞きました。これはもう、ちょっと信じられなかったです。

でも実際、先ほど話したA君は「がいじ、がいじ、お前の行っているあの部屋は、ばかなやつがいる部屋だ」と、そう言われて毎日泣いていました。障がいについては、子どもの特性をよく理解して、子どもの学校での苦しさをキャッチして、子どもの思いをちゃんとわか

ってもらおうということはすごく大事なことだと思っています。

でも、それにしても、そのような差別的なものをつくり出しているものは、学校とか大人の側、社会の側で、それを見たり聞いたりしているから子どもも同じようにするんじゃないでしょうか。それをすごく感じています。

居場所という意味で話したいと思うんですが、はぐルッポの子どもたちを見ているとやはり大事なのは、保護者も学校も私たちも、子どもの今の状態を子どもにとって、今、必要な時間なんだよということを認めてあげること。そして、親や学校にとってというのではなく、子どもにとって必要なことを、それはもう大人にとっては無駄なことと思うかもしれない。でも、それをしながら子どもがエネルギーをためて、自分の力で歩みだすことを待つことだと、そう思っています。だから、それができる場所が欲しいと思います。

大人は子どもによかれとか、子どものためにとか、いろいろ考えます。周りから見たらかわいそうだとか、それからどうにかしてやりたいと手を出したくなるのは当然だと思うんですけども、子どもから立ち上げるものでなくてはいけないと思っています。

不登校であるということを受け入れてくれたように見えて、でも実は休んでいいけれども、元気になったら学校へ行こうねとか、学校へ行かなくてもいいから勉強しようねとか、学校へ行かないならフリースクールとかへ行っ、ちょっとほかのお友達と付き合ったほうがいいよとか、何か、取引をしているようなものになってしまうのは、子どもの意思から立ち上がるものではなくて、やらされている、やってもらっているという、そういうものになってしまう。

ですから、場所を用意してよかれと思うことを、それをしなければいけないとか、した方がいいよという大人の思いが先行してしまうと、そしてそれがよいことだとなってしまうと、それに対応できる子どもだけの場所にまたなってしまう、そう思います。

はぐルッポは、今、どんな子も、ただいい場所です。ゲームしていてもいいし、寝ていてもいいし、歩き回っていてもいいし、本を読んでいてもいいし、絵を描いていようが、料理していようが、みんなとウノしようが、トランプしようが、それでもいいよと認めています。そこに必要とされたときに、私たちスタッフは仲間に入れてもらいます。

どの子も好きに過ごしているうちに、自分で考えて自分で決めて動き出します。そして助けを求めてきます。それを待っている場所です。

もう一つ、地域とのかかわりということで昨年とてもいいエールをいただきました。青年会議所の若い人たちとか、企業の人たちがはぐルッポの存在を知って積極的にはぐルッポを援助してくださることになりました。バンド活動をしている彼らがライブのチケットの売上げをはぐルッポに寄付したいと申し出てくれて、タイムカードのシステムを入れてもらいました。それからギター好きな高校生と話してくれて、では今の夢をかなえてあげようと、ライブハウスで彼のステージをつくってくれたり、ギターをプレゼントしてくれたりしました。それから、イラストの得意な中学生には仲間の印刷会社の社長さんがとても強力な援助をしてくれました。子どもたちも、それから、私たちもそういう若い人たちに支えられ

てきています。

はぐルッポの子どもたちが、前に女鳥羽川という川があるんですけれども、施設が狭いものですから、そこでもっと遊びたいよと言ったときに、その企業の若い人たちが総出で来て、川の草刈りをしてくれました。

それから信大が近いことから、信大の学生さんたちが授業と授業の合間に、時間が空いたからといって子どもたちと遊んでくれたり、支えてもらっています。子どもたちも私たちも、そういう若い人たちにも支えられて助けてもらっています。

そういう子どもの側から出てくる思いを一緒に形にしていけるような地域とのかかわりというのができていけばと思っています。

まとめますが、今、大人が考えなければいけないことは、子どもを制度や施設に合わせるというのではなくて、子どものいのちの側に制度や仕組みを引き寄せて変えていくという、そういう視点が求められているということだと感じています。ありがとうございました。

(2) 県の取組について

(伊藤企画振興部長)

西森様、ありがとうございました。

続いて、教育委員会事務局から、現状と今後の取組の方向性について、若干、説明をお願いしたいと思います。よろしく申し上げます。

(松村心の支援課長)

お願いいたします。お手元の資料の「不登校等の抜本的な対策について」をご覧ください。

まず1の現状についてでございます。不登校の状況は、もう1枚のペーパーである参考資料にありますように、一時、減少傾向にあったものの、平成25年度調査以降、国、県ともに継続的に増加している状況です。特に小学校は全国の比率より高い状況が続いております。

県教育委員会ではこの状況を受け止め、喫緊の課題として二つの問題意識を持っています。一つ目が、これまでの不登校対策は、何か根本的に違っていたのではないかとということ。二つ目が、学校以外の多様な学びの場への支援が不十分なのではないかとということです。

一つ目の問題意識については、日本財団の行った不登校傾向にある子どもの実態調査では、学校に行きたくない理由として、先生とうまくいかないということが38%、一方、学校が回答する国の問題行動等の調査における不登校の要因では、教職員との関係をめぐる問題が2.2%と、大きなずれがあることが分かってきています。

2の今後の方向性の(1)として、従来の教員の経験に基づく対応だけでなく、エビデンスに基づいた科学的知見を活用した子どもからの調査により、問題を可視化して取り組むことが必要ではないかと考えております。

また、子どもが学校に合わせるという考え方ではなく、子どもに学校環境を合わせていく

という柔軟な考え方も重要ではないかと思えます。

もう一つの問題意識、学校以外の多様な学びの場への支援が不十分なのではないかということについてでございます。

県民文化部とともに、8月3日に「学校に行くことが難しい子どもたちへの学びの支援」ということをテーマに、政策対話を実施したところ、フリースクール関係者、不登校支援団体、不登校当事者等、多くの参加があり、様々なご意見を伺うことができました。

不登校児童、生徒の休養の必要性、不登校は問題行動ではないということ进行全面に出して、学校の対応を変えていくことが重要であるというような意見や、不登校の子どもたちを含めて、子どもの個性を大事にするという考え方を、地域も学校も持てる社会に変えていくことが必要など、貴重なご意見を聞くことができました。

政策対話の場を通じて教育機会確保法の趣旨が、学校現場だけでなく地域にも理解されること、また、学校へ行けない状況の子どもたちが学ぶ場への支援についても不十分ではないかという、もう一つの問題意識が一層、強くなりました。

このことから、2の今後の方向性の(2)として、すべての子どもたちの社会的自立を目指し、県及び県教育委員会が、学校以外の多様な学びの場と連携した取組が必要であるとしました。

3の具体化に向けたプロセスにお示したように、今後、県教育委員会と県民文化部とで基本方針を策定する委員会を年内に立ち上げ、ここで課題の共有をするとともに既存事業の見直しや、新規事業についても協議し、さらに民間団体と学校関係者等による意見交換会からのご意見も踏まえ、基本方針を策定するなどし、この抜本的な対策を具体化してまいりたいと考えています。

本日は皆様からの忌憚のないご意見、ご示唆をいただければと思います。説明は以上でございます。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございました。ゲストお二方からご講演をいただきました。

まず和久田様からは、教育にエビデンスとか科学を取り入れること、また、子どもの環境に注目したRTIモデルをご紹介いただき、これまでの支援のあり方というものを見直して、できれば長野モデルを構築したらどうかというご示唆をいただきました。また西森様からは、やはり大人が丸ごと子どもを認めてあげる、そういった環境、それも大人のお仕着せではなくて、子どもの立場で自由に安心できるような、そういう場をつくってあげると必要があると、学校の役割はすごく大きいんだけど、学校も変わっていく必要があるんじゃないかというご示唆をいただいたと考えております。

ただいま、教育委員会事務局からも、今後の取組の方針、方向性について説明がありましたが、今後、あえて不登校ということではなく、学校に行きたくない、行くことができない子どもたちへの支援について、どうしていったらいいのかということについて議論していきたい

と思いますので、ゲストお二方への質問も含め、ご発言いただければと思います。順次、お願いいたします。どなたかご発言いただけるとありがたいのですが、どうでしょうか。

(伏木教育長職務代理者)

どうも、お二方、今日は貴重なお話、ありがとうございました。

実は私自身の大学での専門分野で、オルタナティブ教育という内容を取り上げております。従来型の日本の学校教育はある意味成功してきたけれど、一斉画一で伝達式の効率優先の授業をやっていくことを前提にすると、「不登校」、「逸脱する子ども」、「ドロップアウトする子ども」を出してしまうことは、もうこれは避けられない。

今までは、ある意味、教育全体が子どもたちを選別する装置になっていたかもしれない。それが社会で機能していたかもしれないけれども、やっぱり一人一人に目を向けて多様な教育ということを考えるとすれば、今まで当たり前のようにやってきた、一斉画一授業では限界があるのだから、多様な教育を導入すべきだという結論に落ちつくんだろうと私も考えています。では、どういうモデルがあるかという、やはり、今日の議論の基調にもなっていますように、学校の環境に合わせるのではなく、子どもの学習スタイルなり、子どもの多様性に合わせるということをもう少し導入していくという方向性だろうと思います。そんな観点で、私自身も大学での教育内容を意識してやっております。

そういう観点から、質問も交えて、お二方にちょっと伺います。

今まで、文部科学省も大変熱心にやっているし、県も市町村も一生懸命やってこられている。不登校対策も学力向上対策なども真摯に取り組んでこられた。しかし、これらを別立てにして対応することに限界があるんじゃないかと思っています。例えば学習指導を一人一人に合わせるといふか、教科書の内容を教えるのではなく、子どもの興味・関心、学びのスタイルに合わせて、学習指導要領に規定されている内容を保障していくようなアプローチといいますかね、そういう学習指導の中でも、子どもたちの自己肯定感なり子どもたちの興味・関心を高め、自信をつけていく学びがあるように思うのです。

こういう学習指導と、集団指導や従来型の学校教育のやり方に合わない子のためのメンタルな指導を、切り分けて考えるということではなく、これらを合わせる形で取り組むことが必要だと思うのです。子どもたちが「学ぶことが楽しい」と思えるような空間をつくっていく。これを教室に少しずつ実現させていくことが不登校対策にもなると、私なりに考えていろいろと取り組んでいます。

和久田先生、それから西森先生、それぞれのお立場からどんなふうにお考えなのか、お聞かせいただきたいと思います。

(和久田主席研究員)

先生がやられるオルタナティブスクール、日本にはない制度で、非常に僕も向こうで見させていただいて、大変興味深いと思ったのと、先生が選別する装置というのもセンセーショ

ナルな言い方で、それも変えなければいけないなと思ったところです。

今、先生がおっしゃった学習指導と生徒指導、行動の指導の重なりあいというのは当然のことだと思います。僕の主張はいつも同じなんですけれども、何か問題が出てきた子どもに対して指導、支援をすることが今の場合はほとんどですけれども、今、普通と言われている子どもも相当、難しい状況の中で、ぎりぎり普通でいると言えると思います。

我々が子どものときもそうだったんですけれども、普通といわれながらも、実はぎりぎりの状態だったのに対して、地域の友だちの存在があって救われたということがある。

今の子どもたちはネットという、またまったく違う環境の、デジタルネイティブというんだそうですけれども、私たちとは育つ環境が全然違うので、そういう子どもたちは、今まで僕たちのときに保護的に作用していたものがなくなっている可能性があります。

ですから、このいわゆる普通の子どもたちに対して学習指導はもちろんですけれども、一方で、子どもの情動だとか、社会性の発達を支援する仕組みは提供せざるを得ないと思います。それを今、勘のいい先生はよくやられている。でも勘のいい先生ばかりではありません。つまりどの先生もできるように、一つのシステムとして、エビデンスベースの整備をしていかなければいけないと思っています。

ただ、今までは日本ではスキルが高い先生が多いので、問題にならなかった。でも、子どもの発達の変化の方が先に行ってしまうので、追いつかなくなってしまっています。そこを埋める仕組みというのは実はもう既に行動支援学だとか、脳科学では回答は出ているように思います。特に思春期の脳の発達の不安定さというのは情動の問題と前頭前野のバランスの問題として把握されていますし、その支援方法についても分かっているわけですから、それを実際に先生たちの間で共有し、それから支援の具体的な方法まで共有するというふうに、より実践的なレベルまで考えていかなければなりません。つまりただ理念だけでは良くないと思います。これは僕の意見ですけれども、ありがとうございました。

(西森代表)

難しいことはよくわからないんですけれども、多様な学びというのは今、本当に考えていかなければいけないなと思うんですが、はぐルッポで遊んでばかりいる子が、やっぱりちょっと勉強したいなと思うようになって、「勉強させてくれないかな」、「僕、勉強したいよ」と言ってきたので、私たちは、では勉強する場所もつくろうねとって、勉強だけをする日を設けたんです。

勉強したい子は、みんなが遊んでいる横でも勉強しているんですけれども、子どもたちがやりたいことが出てこない、やっぱりやらされ感になるのかなと感じています。

発達障がいの子がほとんどなんです、来ている子は。だけど、発達障がいだから何ということではないんですね。環境さえ整っていれば、この子たちだって十分伸びていくし、自由に過ごせるということを思うと、やはり、何か差別されてしまっているという状況を、まず、どけていかなければいけないというのは感じています。

一方、さっきのA君の話ですが、すごくいじめられて「がいじ、がいじ」と言われていて、それを言っている子というのが、案外、いい子と呼ばれるというか、先生に信頼されているいろでできる子だったりするので、そういう子どもたちの、「学校でもいい子にならなければいけない」、「家でもいい子にならなきゃいけない」という心の闇がうんとある、そういうことから考えていかないと、いろいろなことがならされていかないかなとも思います。

それと大空小学校に関する本も出ていて、先生が、子どもがキレて、教室の外へバーッと出ていったときに、大体の先生は、何で出ていくんだとか、何をしているんだと言うんだけど、そうじゃなくて、何で今、あの子が出ていったのかなと、みんなに聞くと。そうすると、あの子は今こうこうで、頭が真っ白になっちゃったから出ていったんだよということ、その子のことをちゃんと考えられるようになる。だから区別して、違う教室をつかっていく支援とかをやるのではなくて、みんな一緒にいろいろな人がいるんだよということを考えていくような環境をつかっていくこと自体が、多様な学びにつながっていくんじゃないかなと思いました。

(阿部知事)

私からいいですか。お二方からお話をいただきました。ありがとうございました。

ちょっと教育委員の皆さんにご議論いただく前提で、いくつか私の考え方を共有していただいて、ご議論をいただければと思います。

一つは、先日、長野の子ども白書編集委員会の皆さんに来ていただいて少し意見交換しました。そのときに不登校の子ども、高校生の子ですけれども、作文があって、別冊に出ています。長野県の教育の現状、あるいは不登校の子どもの気持ちを結構表しているんですね。ちよっと簡単に紹介します。

まず、この子、小学生のときから不登校になっているんですね。学校の先生との関係で、学校の先生が、まず、いろいろな反発する子どもたちに怒鳴り散らしていたと。決まり文句が「そんなんじゃ、社会でやっていけないぜ」で、小学生だったので、そこに適応できなければ生きていけないものだと漠然と思っていましたと。

それから、学校の中で教員と生徒、教育委員会も学校の先生もいるのでちょっと耳が痛いかもしれないんですけども、教員と生徒は暗黙の了解で平等ではなかったと。教師が何を言おうと逆らうものはことごとく叱られると。

卒業文集の例を書いてありますが、卒業文集、クラスのいじめ、荒れ具合、学校での大人と子どもの不平等さなどの思いの丈をつづったんだと。そうしたら校長室に呼び出されて、校長と教頭が僕の文章の訂正を求めてきたと。訂正を結局させられたみたいですけども、この子はなるべく最小限に訂正したと書いています。

それから、小学校で学んだことは多かったと。学校の現実はなかなか外に漏れにくい。人間は自分が置かれている環境を正確に知るには、一步、離れて見なくてはならない、こうしたことを学んだと、小学校のときに学んだと言っています。

それから中学。中学に行ってからこの子が感じたのは、子どもに子どもを管理させる仕組みができ上がっていたと。ちょっと、この子が言っている言い方ですからね。

要は、例えば無言清掃。私も無言清掃にはいろいろあるんですけども、無言チェックというものがあって、黙って清掃するだけじゃなくて、清掃中に委員が見守りをして誰か話をしていないか、ふざけていないかチェックすると。

それから生活委員。全校集会をやるときにちゃんと列になって歩いている生徒が笑っていないかと、話をしていないかチェックすると。彼的には、子どもに子どもを管理させる仕組みだという言い方をしています。

この彼はやっぱりいろいろ問題意識を持って、非常に問題意識を持った上での不登校の子だなと私は思っているんです。結局、大人が問題だと、最初、先生が問題だと思っていたけれども、この子は結局、この学校内の価値観のおかしさを生み出している根本は子どもでも大人でもない、この学校のシステム自体にあったと言っています。

社会の中で実は取り残されている学校と社会とのずれ、近年の不登校児童増加は必死にこのことを訴えているんだと。僕は寺子屋やフリースクールといった、価値観の開かれた環境で子どもが学ぶ選択が普通な社会になってほしいと思っている。

それから、僕の理想の教育現場、それはあらゆる人生を歩んできた人が交わる、世代を越えた環境でもあり、お互いを一人の人間としてその人のそのまますを認め合うような場所だと言っています。もちろん、これは参考ですけども、すごい文章を書いているなどと思って私は感動していますが、かなり彼の訴えていることの中に本質的な課題があるんじゃないかなと私は思っています。

そういう意味で、先ほど教育委員会から説明してもらった学校そのものを変えていくという、私は教育委員会事務局から、学校そのものを変えていくということが出てきていることだけで、非常にこれまでと比べれば画期的だなと思っているんです。ぜひ、今のような思いを持っている子どもたちがいるということを前提に、学校をどう変えていくのか、それから、学校以外の居場所とか選択肢をどうしていくのかということと一緒に考えていただければありがたいなということで、ちょっと時間を取ってしまって申しわけないんですけども、どうしてもこの作文だけは紹介しておかなければいけないと思ったので、お話をさせていただきました。よろしく願いいたします。

(矢島委員)

ありがとうございました。私も子どもに合わせた、子どもの多様性であるとか、それから社会の変革のスピードに合わせた学校変革とか、学校だけではなくて、大人の意識改革、組織改革というのは本当に重要だと思っています。

そんな中で一番ぶれてはいけないことが、いろいろなものを変革していく中で最終的に長野県の子どもに対してどうあってほしいのか、というところを共通認識していないと、それぞれいろいろな変革をするのはいいけれども、そこだけの変革に終わって、結局は大人の

都合によって子どものためになっていなかったということがわからなくなってしまうと思います。長野県の子どもにとって、いろいろ導入するに当たってとか、変革するに当たって目的が何か、最終目的は子どもにとってどうあってほしいのかというところを皆さんで共有していきたいなというのがあります。

それから、先ほどの知事のお話の中で出てきた、私、子どもたちと多く出会っていますが、私は主体が子どもであって子どもに決めさせる。ルールも子どもと一緒に決める。

主体が子どもなので、子どもにとってどういう学校が心地いいのかというところを、子どもに決めさせるためには子どもの力を信じていないとできないことであって、子どもは、大人の言うことを聞いておけばいいとか、子どもなんて、そんなのこれから出ていくんだから、もっと社会の厳しさを大人が教えてやるとか、そうではなくて、子ども自身に力があるということをおとなが信じてほしいと思います。

そして私はさまざまな子どもに出会っていますが、本当に多くの子どもが学びたいと思っているんですね。それはどこであっても、環境や場所がどこであっても学びたいという気持ちはあります。私はそこを保障してあげたいなと思います。

学校でなくても、いろいろな場所で学べる場所の確保、環境を整えてあげたいです。先ほど西森さんの話に出てきました学校に子どもが合わせるのではなくて、子どもに学校が合わせる。そのためには、どうしていけないのかということではなくて、私は何がどうなったらいいいのかというのを、子ども自身にぜひ聞いていただきたいなと思います。

虐待とか家庭内のDVとか、力を削がれている子が学校に行けないときにどうして誰も気づいてくれなかったのと、何人もの子どもにも言われたんですね。ですから、環境も含めて、何がどうなったらいいいのかというところは、ぜひ子どもに聞いてほしいなと思います。

それから先生の教育観というところもやはり変えていかなければいけないというところで、先生と学校が変わるだけではなくて、学校、家庭、地域、すべての大人が、子どもにとって、教育機会確保法等も含めて、法律が今、日本ではこうなっていますよ、だから、すべての子どもにとってどうやって安心で安全であって、その子が生き生きとその子らしく生きられるかというところをみんなで話し合う場所も必要かなと思います。

頭で多様性と分かっているけど、実際、その多様性が認められないとか、自分の価値観以外のものは認められないというところも多々あるかなと思いますので、大人自身が振り返るといことも必要だと思います。もう一つは選択肢をなるべくたくさん出してあげたほうが、不安をおおらないかなと思います。

例えば小学校に入学した時点で、もし学校に来たくないとしたら、こういう選択肢がありますよ、こういう方法がありますよというような、初めからたくさん選択肢を出しておけば、いざといったときの、それが予防になると思います。そういう選択肢をたくさん出してあげれば、親自身も悩まなくて済む。こういう方法もあるんだということを選べるという自由というのはぜひ保障していきたいなと思います。

(伊藤企画振興部長)

ありがとうございました。今、お二方に質問がありましたけれども、どういたしましょう。

(矢島委員)

もし時間があれば、聞いてみたいです。

(和久田主席研究員)

ありがとうございました。僕の立場からは、今、矢島先生のおっしゃったこと、それから知事さんがおっしゃったこと、とてもとても同意です。この作文、すごいですよね、これ、もう研究者が書いたかなというようなところがいくつかあって、非常におもしろく読みました。

僕の立場からはですね、今、矢島先生が言われたゴールとは何かとか、子どもと一緒に決めるといったときに、これはバイアスがかかっちゃいけないところだと思います。バイアスってというのは何かというと、ある特定の群の子どもたちの意見だけが大きく反映されることにより偏った意見になることを言います。特定のグループの特定の先生の意見だけでは不十分です。公教育であるならば、どの子にとってもいいことを考えなければなりません。これは結構難しいことです。

どの子にとってもいい選択肢を用意するとか、どの子にとってもいいゴールを設定するというのはやっぱり難しく、それについては研究が回答をしています。教育のゴールをどこにするのかについて、OECDの研究では、例えば子どもの将来の幸せといったときに、その幸せの定義についていくつかの方法を持っています。例えば問題を起こさないことを幸せだと定義する場合もあるし、収入が高いとか、家族のあり方とか、就労しているとかを幸せと定義する場合があります。それを決めていかなければいけない。

子どもと一緒に考えるといったときに、子どものうちでも、例えば先ほど出てきた発達障がいのお子さん、今、非常に困っているお子さん、この子たちの意見を反映させるのは当然ですね。でも、意見は言っていないけれども、今、一生懸命、学校現場でぎりぎり適応して何とかしている子どもたちの意見も拾わなければいけません。そんなふう子どもたちの意見をまんべんなく拾って、間違わない将来をつくっていくには、僕の立場で、今日の役割としてはやはり科学が必要でしょうと言いたいです。そこをしっかりと見ていく方法を一緒に考えていきましょうということが、そこが重要だと思うし、それでないと、また理念だけだとか、一過性のムーブメントになって終わってしまう怖さがあります。

これはプラティカルな問題で、公教育ですから責任が発生しますから、一つ一つ確実にやっていくための戦略が必要です。もちろん予算もかかるものですから、そのためには科学をもって、どこから始めることが最も効果的かということを考えられた方がいいのではないかなと思います。ありがとうございました。

(西森代表)

長野の子どもはどうあってほしいのか。私はやっぱり自分で考えて自分で行動できるような、そういう自立心のある子になってほしいというのが一番です。ただ、大人がそれを待ってられない、今、そういう現場がとてたたくさんあると思います。

私は学校を否定しているわけではないので、学校で、ほかの子が言ったことを聞いて考えて自分の意見を言うとか、ほかの子のやることを見て自分でも考えるという、そういう群れてやることが大事なので、そういうことも含めながら、本当に多様な場所というのが必要だとは思っています。

ただ、あまりに今の大人が子どものためとか、子どもによかれと思ってやっていることが先回りし過ぎていて、子どもの自立を奪っているなというのはすごく感じるので、そこを何とかできないかなと思っています。

それから子どもに聞くというところですけども、ちゃんとしたことを言える子はすごい立派なことも言って、大人からも意見がいっぱい入っているだろうと思うんですけども、そういうことを言える子がいっぱいいるんですよ。

道徳なんかもそうですけれども、先生が喜びそうなことを言える子っていっぱいいるんですよ。そうさせてしまっている大人がいるんじゃないか、そこを変えていかないとイケないかなと思っています。

(荻原委員)

お話を伺った感想を述べさせていただきたいと思います。

お二人のお話や、先ほど知事に紹介していただいた高校生の文章も読ませていただくと、教育だけではないとは思いますが、何かをやるには、規格というものが必ず必要になってくる。教育でいうと「学校」・「先生」・「生徒」・「学習指導要領」などの規格の中で、その規格から逸脱したりはずれたりすると、「問題」ということにこれまでなってきただろうし、今もなっているのかなと思います。

この規格のあり方がもう少し緩やかな形でもよいのではないかと。例えば野菜でいうと、きゅうりはまっすぐでないとう出荷できないみたいなところもあるようですが、曲がっていてもおいしいじゃないかという、そういうものもありだよというものが必要なのではないかなと思ひながら、お話を聞かせていただきました。

スポーツの現場の話で恐縮ですが、これまでスポーツという、監督やコーチが非常に強い権限を持っていて、例えばスポーツ指導者が、「自分の言うことを聞かないと、あるいはこういう練習をやらなければ選手メンバーにしませんからね」と言う、子どもたちは従わざるを得ないという状況もありました。

そういう中では、子どもたちは、先生の権威を感じていると思ひますし、やはり教える側の意識を変えていかなければならないと思ひます。教える立場の、学校でいえば先生、スポーツ現場でいえば監督やコーチも、最近ではアスリートファーストという言葉が随分聞か

れますが、今、さらに進展して、プレーヤーズセンタードアプローチといって、とにかく選手を中心に置いたサポートのあり方というものが、かなり浸透してきています。

多様な学びの場をつくっていくというのは時代の要請でしょうし、皆様のお話をお伺いして、非常に同感というか、必要性を深く感じました。

一方で、そういう多様な学びの環境をつくるということは、コストもかかってくるのだらうと思います。そこは先ほどの和久田先生のお話のように、今、コストがかかったとしても、例えば幼少期、児童期の問題というのは成人の問題に移行していくということを考えれば、未来のための投資としてやるべきことであると感じました。

(中澤委員)

知人のお子さんが、去年、4年生の女の子なんですけれども、不登校になってしまって、そのお母さんが、私はすごいなと思ったのが、行きたくない理由を書き出ささいと言われてその子が10個ぐらい書いたんですね。例えば上靴をずっと履いているから足がかゆいとか、もっと教科書じゃなくて本物を見たい、校庭が砂漠みたいで砂しかないとか、ずっと書いてあるんです。全部、これ納得できる。

先生たちはつっかけを履いているから、私たちは裸足でもいいのにと思ったりとか、本当にそれを見ていろいろ思いました。

そして、そこですごいなと思ったのは、お母さんが、じゃあ、どうなったらよいかを考えてみたらという提案をして、子どもが例えばたまに上靴を脱いで裸足になりたいとか、もっとたくさんのお草のところに言って知りたい、草がはえていて丘があったり、虫がいる校庭だったらいいとか、いっぱい書いたんです。これはひとつ、和久田先生がおっしゃった、科学かな、何か関連しているかなと感じたことが一つです。

それから、私はいろいろなところに、いろいろな子どもの、いろいろな居場所があっただろうかなと思っています。それぞれの子どもの周り、地域に、たくさん居場所があっただろうかなと思っています。

私は幼稚園をやっていますけれども、土曜日は小学生プログラムがあるんです。それは7年ぐらい前に軽井沢に風越をつくった本城さんと一緒に、小学生プログラムをつくったのがいまだに続いているんですけれども、今、51人通ってきています。

初めのうちは、何というか、協力する力が育ったらいいよねとか、何か話し合える力が育ったらいいよねとかと言いながら、いろいろなアクティビティを入れていったんですね。それはそれですごく意味があったとは思いますが、ここ数年、朝7時半から8時ごろに来て、夕方4時半まで、51人の子どもたちがひたすら好きなことをしています。遊ぶだけじゃなくてごろごろもするし、やりたいことをそれぞれにやっているんです。部屋の中で、自分たちのところにシートを敷いてゲームみたいな、トランプみたいなものを始めるとか、いろいろなことをしていて、その51人の子どもたちを見ていて、いわゆる普通といわれている子どもたちも圧倒的に多いんですけれども、それでもいっぱい悩みを抱えているんだな

ということが分かり、本当に不登校になってもおかしくないような状況というのはたくさん子どもたちも抱えているんだろうなと思っています。学校や家庭生活でそれぞれの子どもたちが抱えたものをリセットしたり、リフレッシュしたりする、そんな場がその土曜日の時間なのかなと思っています。

それと、今日は私がここに来てしまっていて留守なんですけれども、幼稚園の方に一人6年生の不登校の女の子が子どもスタッフという形で仕事をしに来ていますけれども、それぞれの場でいろいろな形が考えられるんじゃないかなというのを、それぞれがいろいろなところで考えてあげてと思っています。

それと、私の立場からいくと、今不登校である子どもたちをどうしていくかという視点と、もう一つは、先を見通す視点が重要だと思っています、私は体の基礎体力と同じように、心の基礎体力というのが大事なんじゃないかとか、そこを育まなければいけないのではないかと考えています。

そういう意味では、意識的な育ての開始を早めなければいけないというか、幼児期あたりから本当に見通していくことがすごく大事なんじゃないかなと思っています、昔だったらでこぼこの道を毎日歩くとか、遊び道具のない中で遊ぶとか、家事を手伝うとか、何かそういう中で人間の体とか心をしなやかにしていたかと思うんですけれども、遊びや生活の中で、そうしながら身につくものが大きいと思うんですね。

本当に体と頭と心と賢明に使って生きている実感を、多分子どもたちは持ちながら育てていくと思うんですけれども、このあたりを意識して、乳幼児期から育てていきたいなと私の立場では思っています。

そして、今、私自身は自然保育というものをやっているんですけれども、多分長野県のやまほいくを始めた方たちというのは、私と同じで、現在の行き詰まり感から自然保育を始めた人って多いと思うんですね。

自然保育は大人も子どもも、命令を出す人と受ける人に全然分かれていないし、みんなまで考えあっているし、自分のやりたいことを自分で進めたり、生活を通して学ぶとか、共同性のあり方とか、多様なあり方を見つけやすいかなと感じていて、ある意味でひとつそこら辺も、私は何かヒントとしてあるような気がしています。

(原山教育長)

特に長野県はそうかもしれないですけれども、学校に行かないということに対する、親も含めた社会、世間のあり方というのは、逸脱がいけないことと捉えているだろうと思って、それが親を苦しめるし、引いては子どもを苦しめるという構造になってくると。

そもそも教育義務型にしてしまえばどこで学んでもいいよという、制度的に担保されていけばそういうことはなくなるんだろうと思いますけれども、日本ではそれはまだ苦しいだろうと、就学義務型のまま行かざるを得ないと思います。

そういう中でどうするかといったら、就学義務という仕組みがある中でも、学校に行かな

くてもいい、多様に学んでいく、学ぶ場所がある、ちゃんと用意してあげるんだというふう
に意識や価値観を転換しなければいけない。もちろん学校が魅力的な学びの場であること
は最低限必要ですけれども、そうじゃない場面が必ず起きるとすれば、その子たちに対して
学校以外で学んでもいいんだよと、そういうことを社会が、みんなが意識して認めてあげる、
容認してあげるというふうにしなない限り、多分、いつまでたっても苦しみが解決しないと思
っています。その意識の転換を図ることも必要ではないかなと、私は思っています。

(伏木教育長職務代理者)

私から、もう一つ、補足させていただきます。ちょうど昨日から今日まで、全国へき地教
育研究大会・長野県大会が開催されています。昨日も原山教育長も私も、課長も、先生たち
も参加していました。私も15年ほど前から小規模校をサポートしていますが、象徴的なのは、
30人学級のような教室でトーク&チョーク、あるいは一斉画一型の授業で、一生懸命に講義
されてこられた先生が、教室にたった3人しかいないのに、同じ型の授業をやるという状況
にしばしば出会うのです。もうちょっと何とか、小規模校ならではの授業をやりましよう
というふうに指導させていただくのですが、そうすると今度は、目が行き届くものですから、
徹底的に教え込んでしまうというか、親切にお節介をし過ぎてしまうのです。子どもの間違
いを放っておけない、手をかけ過ぎるという指導は、善意ではあるのですが、結局は子ども
の自律的に学ぶ力を奪ってしまっているということを授業研究で示すようにしています。
何を言いたいかというと、先ほど和久田先生から、ディスクレパンシーモデルでは、正常で
はない少数の子を見つけて、その子を環境に合わせるための取組をすることになるから、R
T Iモデルにすべきだという、大変貴重な示唆をいただいたのですが、大変共感しました。

不登校という行為になっているその現状に光を当てることももちろん大事だけれども、
もしかしたら多くの教育関係者が、「普通の子」と言われている大多数の子どもたちも、学
びのイメージを傷つけられていたり、自尊心を持てないでいたりする可能性があって、つま
り予防という観点、それから不登校を増やさないという観点、自信を持たせるという観点か
らすると、私はやっぱり学校の日常を見直すべきときが来たと思っています。そしてその核
はやっぱり授業なんだろうと思っています。

そんな観点から、一人一人が自律的に学ぶとはどういうことなのかという問いをもって、
今後は変革していくべきじゃないだろうかと思えます。そうすると、先生たちの得意な分野
の教え方で授業を進めるということも必要なんだけど、子どもが自ら選択して、時間の
かけ方も、もしかしたら学ぶ場所も、子どもが選択して、トライ・アンド・エラーを自分な
りに繰り返せるというチャンスを学校の授業で与えていく必要がある。

つまり、私たちは義務教育の修了時点で、自分の力で、自分の選択で学べるようになった
という子どもを育てていく、私は長野県だろうと東京だろうと、そこら辺は変わらないと思
うのですが、そういう子どもたちの力をつけてあげることが、先の見えないこれからの時代
に、私たちができる信州教育の大事な部分じゃないかと思っています。

今日は和久田先生のお話を伺って、このR T Iモデルで学習指導と不登校などをめぐる生活指導をどう関連させていけばよいかという課題の解決に関して、ヒントをいただいた感じがしました。どうもありがとうございました。感想です。

(伊藤企画振興部長)

時間も迫ってまいりましたので、まとめも含めて知事、お願いします。

(阿部知事)

では、まとめというか、私も少し意見を言わせていただくので、後で事務方でまとめて、次につなげてもらいたいと思います。

まず、私もいろいろな子どもたちと接していて、先ほど和久田さんにおっしゃっていたように、いわゆる社会的に問題を抱えていると言われている子どもじゃなくても、いろいろ世間との、何というか、板挟みというか、生きづらさというのを結構、感じている。要するに例えば、いわゆる学力レベルの高い高校へ行っていたり、社会的な活動を積極的にやっているような子たちでも、結構、何か生きづらさを感じているなというのを、すごく感じています。

そういう意味では何というか、本当に問題が顕在化してからのアプローチではない、R T Iモデルみたいな形で、ぜひ県全体の子どもたちにどうやっていい環境を提供していくのかというのはしっかり考えなければいけないだろうと思います。

今日たまたま、学校へ行く、行かないの話ですけれども、昨日も若い人たち、子どもたちの社会的包摂をどうするかということ、来年度予算の一つの大きなテーマとして考えなければいけないと議論していたんです。

多分、引きこもりの問題であったり、あるいは非行の問題だったり、自殺の問題だったり、私の問題意識は、日本の社会は非常に高度に分業化していて、国の役所もいい意味でも悪い意味でも熱心すぎるので、結構、対症療法でも、何か出るとこれに対しては何とか、こっちに対しては何とかとやっていますけれども、地域にいけば、みんな同じような人たちがやっているの、国の言っていることを唯々諾々と従っているとその地域の最適性、1クラス40人いる東京の子どもも、へき地の2人か3人しかいない学校とか、福祉学校の子どもも同じことをやっているというのはどう考えてもおかしいので、それはやっぱり、長野県からしっかり発信して変えていかなければいけない分野なのかなと思います。

そういう中で、ちょっとまとめなければいけないので、この不登校等の抜本的な対策という、つくってもらった資料の下の方に、今後の具体化に向けたプロセスと書いてあるので、多分、これでいいかどうかという話なんだと思うんですけれども、あまりここはご意見が出なかったもので、ちょっと私の意見を言っておきます。

まず、これ基本方針をつくるということになっていますけれども、名前をまずよく考えた方がいいなと思っています。ここに何も書いていないので、多分、放っておくと、「不登校

等の抜本的な対策、基本方針」みたいになってしまうような気がするんですけども、それだと、今、出ている議論をあまり反映していない話になっちゃって、何か不登校が悪という側に、この紙自体も、タイトルだけ見ると何というか、対策するものという話になっちゃっているんで、基本方針の名前はまずよく考えてください。

それから、今日もいろいろ議論が出ていましたけれども、やっぱり子どもたちにどうあってほしいとか、学校って何のためにあるのかというのは、この問題を考えるときに、しっかりそもそも論から考えなければいけないだろうと思いますので、ある程度そのところは、教育委員の皆さんによく考えていただかなければいけないんですけども、重要な要素、その前提がないと何をやっているのかよく分からないので、そこはぜひ、しっかりご検討いただければありがたいなと思っています。

教育長には、よく高校改革に関連して、高校ってそもそも何のためにあるのと、私はいつも投げかけているんです。義務教育でもないし、大学の予備校なら予備校で割り切ってしまった方がいいし、高校というのは一体、何のためにあるのと、いつも投げかけていますけれども、多分、小学校、中学校は今までそういうものの投げかけすらなく、義務教育だから、法律で決まっているからあるのが当たり前でしょうという感覚で来ていると思うんです。小学校も中学校も何なのということが、多分、子どもたちの腑にも落ちていないんじゃないかなと。何かあるから行きなさいと、もう何歳になったら行くのが当たり前、小学校を出たら中学校へ行くのが当たり前となっているので、多分、子どもたちも腑に落ちてないところがあるんじゃないかと思うので、ぜひ学校って何なのというのは、この際、考えていければありがたいなと思います。

それからこの教育議論とか、いろいろな政策を考えていて、いつも私、ちょっと課題かなと思っていることの一つに、今日、例えば和久田さん、西森さんからお話をいただいて、和久田さんの科学的アプローチ、まったく、私、大賛成です。いつも何か、いいよね、フェイスブックでいいねマークをして終わりという習慣が身につっちゃっている。「いいね」まではいいんですけども、そこからどうするかが、多分、もっとも重要な話で、ぜひどう取り組むかというところはよく考えてもらいたいなと思っています。これは私も一緒に考えなければいけないと思います。

私から少し提案すると、一つは、今、皆さんと議論した話は、ある意味、学校のあり方を変えるというのは価値観を変えるということなんで、本当は教育委員の皆さんと私とでちゃんとメッセージを出さないと、この議論の感覚というのは、子どもたちとか、家庭とか、学校には多分、伝わらないんだろうと思うので、何か一緒にそういうメッセージを出したらいいんじゃないかなというのの一つ。

それから、先ほど和久田さんから一緒に研究しましょうと投げかけていただきました。実は教育のところは、義務教育は特に市町村教育委員会が主たるところを担っているんで、いつも私、県と市町村の役割分担のあり方というのはどうあるべきなのかと考えているんですけども、特に、ここの分野はやっぱり県として、エビデンスを積み重ねて研究していく

ということが、実は義務教育の部分は、現場のオペレーションは市町村教育委員会と学校がやってくれているので、多分、県の役割の本当は大きな部分なんじゃないかなと、今日、お話を伺っていて感じました。そこはしっかり考えるように私もしたいと思いますので、ぜひ教育委員会でもそういう視点で考えていただければと思います。

その上で実際の変革の主体が、おそらく今言ったように市町村教育委員会だとか、小学校、中学校だとかの学校現場の校長先生、教頭先生、学校の先生たちなんで、そういう人たちにどういう行動をとってもらえるようにするべきかというところまで落とし込まないと、何となく、今日の話はよかったねということで終わってしまうので、ぜひ、何かそこも工夫をしていただければありがたいなと思います。

それから最後、4番目が、今日もう一つ、学校のあり方を変えていくということと、それから学校以外の学びの場をどう連携させるかという話で、ちょっと今日、時間がなくなってしまったので、本当は質問したかったんですけども、はぐルッポで西森さんがやられていて、ここは微妙にいろいろ議論があるところなんですけど、私は県民の皆さんからお預かりした税金を執行する立場なんで、先ほど荻原委員もおっしゃったように、何でもかんでもお金を出すというわけにはいかないと思っています。あるいは、何でもかんでも協力し合うということではできないと思っています。

それにはやっぱりこういう居場所、こういう学びの場なら、これぐらいの財政支援をしてもいいよねとか、あるいはこういう場所なら、もっとこうやって協力し合ったほうがいいよねと。私は基本的には広くとは思っているんですけども、でも実際に、人的に受ける支援は限られている中で、何でもかんでも応援するというのは、実際問題、不可能なので、そのときにどういう学びの場とか、どういう居場所を、どういう形でサポートしていくとか、あるいはどれくらい、例えば財政的にも応援していくのかということところは、今日の時間では多分足りないんで、少しそこは、私も一緒に考えますので、さらに踏み込んだ検討をしないといけない部分じゃないのかなと思っています。

私は、学校以外の場というのは確実に必要だと思っているので、実際、お子様をもたれている保護者からすると、学校へ行けば、公教育にはいっぱい税金が投入されているのに、学校のルートから外れたら全然、私、納税しているのに何もサポートされていないというのは、多分、本来おかしい話だと思うので、それは前向きに考えなければいけないと思います。ただ、現実的な制約条件の中でどう考えるかというのはしっかり考えるべき分野かなと思っています。

まとまらない話で恐縮でありますけれども、今後、まだ引き続き検討していくというテーマになっていますので、ちょっと私の問題意識を申し上げました。

今日は時間をオーバーしてしまって恐縮でありますけれども、和久田さん、西森さんには大変お忙しい中、お越しいただきましてありがとうございます。いろいろお知恵をお借りしながら進めていきたいと思いますので、よろしく願いいたします。

また教育委員の皆様方には、引き続き、今、お願いしたような点も含めて、教育委員会の

中でもご議論いただければと思いますので、よろしくお願いたします。
ということでいいですか。どうも本日はありがとうございました。